

佳作

くじまじも

福岡県 福岡教育大学附属福岡小学校四年 松井 優希

ぼくには、はなれていても大切な友達がいる。

同じマンションに住んで、同じようち園に通って、毎日遊んでいた、そら君だ。

だけど、ぼくが引っこしてから全然会えなくなつた。いつもいっしょにいるのが当たり前だったから、とても変な感じだった。

そんなそら君と、夏休みに会えることになった。久しぶりでうれしいのと、ちゃんと話せるか不安で眠れなかった。

なつかしいそら君の家に着いた。ドキドキしながらピンポンをおした。

げん関からそら君が飛び出して来た。何だか照れて、二人でニヤニヤした。

いつも遊んでいた公園に行くことにした。そら君は、足がとても速い。毎年運動会のリレー選手に選

ばれていてうらやましかった。だけど今日は、ぼくから、かけっこをいどんだ。小学生になって、ぼくもちよつとだけ、足が速くなった自信があったのだ。いざ、勝負。

きん差で負けた。くやしかったけれど、やっぱりそら君はすごい。

「どうやったらそんなに速く走れると。」

と初めて聞いてみた。そら君は笑顔で二つのコツを教えてくれた。遠くを見て走ること、体重を前にかけることだった。そら君は何度もぼくの練習に付き合って声をかけてくれた。

「優希君、すごい。速くなったやん。」

とそら君にほめられた。ぼくは、いつもすごいと思つているそら君に、そう言ってもらえて、鼻のおくがツーンとした。とてもうれしくてピョンピョン飛びはねてしまった。

そして、ひみつ基地だった遊具を見つけて二人で走り出した。ようち園生の時は、中で立っても外からは見えなかった。でも今は、中に入って立ってみると首から上が外から丸見えだった。そら君と顔を見合わせて大笑いした。

久しぶりに会ったのに、毎日遊んでいるような不

思議な気持ちになった。心でつながるってこういうことなんだな、と思った。そんな友達がいるのはしあわせなことだ。ぼくは、小学校にも大切な友達がたくさんいる。みんなともずっとそら君みたいな友達でいられたらなと思う。友達って最高だ。